

仮面ライダーズロットル～転移ノ章～

菊川 数時

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終わった運命の先へと続く、滅びかけの『世界』。これは彼女らが『未来』を掴む物語。運命は、廻り始めた……!!

目次

失われた英雄	1
第零廻	5
斯く云え彼らの禁断の立証が始まる。	
第一廻 激動	8
第二廻 鎧武	13
第三廻 協同	18
第四廻 かつてのモノ	27
救国を駆けるが竜騎士	
第五廻 旅の始まり	39
第六廻 項垂れている時間は無く	60

失われた英雄

地獄を歩いた。地獄に嘆く人を見た。手を伸ばし助けを求める人を見た。

全てを見捨てて、『生きている』

耳を塞ぎながら誰かの助けを求めても真っ赤な世界を、歩き続ける。

空を見上げると漆黒の太陽が、『死』を吐き続けていた。

ただ純粋な絶望が街を、命を、願いを、星を。

真っ黒な泥が飲み込んでいた。

幼い自分は瓦礫の中を歩き続けるのは無理があった。こと切れた人形のように地面に倒れる。

命が、魂が少しずつ蝕まれていくのがなんとなくだがわかっていった。

死は近い。

死神が嗤った。

『良かった、良かった。生きてた、生きていてくれた!!』

そんな自分を瓦礫の中から見つけ出してくれた『人』^{ヒーロー}がいた。その人はおれを大事なもの見つけた子供のように優しく力強く抱きかかえてくれた。

『ありがとう、ありがとう。』

その人は泣きながら俺に感謝していた。なんでた助けてくれたのはアンタなのになんでアンタが感謝してるんだ？

その人はただ泣きながら感謝をしていたのだ。

そのあり方に、その思いに、俺は……………。

『憧れ』を抱いていた。

そんな俺の希望を嘲笑うように真っ黒の太陽が俺ら目掛けて死の泥を吐いてきた。それに気づいたその人は俺をその泥から守るように抱きしめた。

その人の肩から見える迫る来る死は頼もしいこの人の背中を容易く打ち砕くのが直感で分かった。

だからまた、祈った。

物語のような御都合主義の塊

そう『ヒーロー』の登場を。

そして、それは叶った。

『Slot Charge』

瞬間、七色の閃光が世界を叩き切った。

その一閃は泥を吹き飛ばしたのにとどまらず、真っ黒な太陽さえも消滅させた。

衝撃は程々な領域であったが、周囲の煙や炎を掻き消した。一瞬にして街はいつも通りの夜の帳を取り戻していた。

そんなだからか、星が点々輝いている夜空に負けないようにその人は立っていた。

黄金のライダースーツに走るように引かれる白銀の装飾。首には真つ赤なマフラー、振り向いて見せてくれた七色の複眼を持ったバツタのような仮面。

俺は……………。

『ヒーロー?』

『……………違う、【仮面ライダー】だ』

その日俺は、《運命》に出会った。

夜を通り過ぎたあと、俺は切嗣の爺さんの元に転がってきた。あの夜を超えて人々は復興へと踏み出していた、その中にあのRIDERがいた。

最初、俺が誰なのかわからなかったようで少し困惑したように頭を搔くのをよく覚えていた。俺もどう説明したものか分からず二人であたふたしていると爺さんが助けに来てくれた。

『爺さん、この人だよ。俺たちを泥から助けてくれた人!』

『士郎……………、それは本当かい?この人なのかい、そのRIDERって人は?』

『ちよつと待てよ、疑問がいくつかある。なんでお前仮面を付けてた奴が俺だって言い切れるんだ?それに…』

二人の質問合戦が俺を止めどなく襲いかかる、だってあの時の光が、厳密にはベルトだけどこの人の懐から光が、溢れ出てるんだよって答えたら苦笑いされた。どうして?

でもそれをきっかけに兄さん、九条誠一とのくらしが始まったんだ

第零廻

第零廻

荒野に一人、青年が立ち尽くしていた。
青年の足元には数多の異形のモノ達が転がっていた。
青年はただ、それを無機質な眼で眺めていた。
彼の世界に十七の世界の化け物が侵略してきた

《グロンギ》

《アンノウン》

《ミラーモンスター》

《オルフェノク》

《アンデット》

《魔化魍》

《ワーム》

《イマジン》

《ファンガイア》

《大シヨツカー》

《ドーパント》

《グリード》

《ゾディアーツ》

《ファントム》

《インベス》

《ロイミュード》

《眼魔》

《バクスター》

その全ての敵が現れ、人類は蹂躪されかけた。
そこに十八の世界に存在する【仮面ライダー】と呼ばれる戦士の力を携えた青年

九条誠一くじょうせいいちが現れた。

しかし、

彼は間に合わなかった……。

彼は自身を憎んだ

彼の記憶には数々の「仮面ライダー」達の激闘の記憶が巡る
彼らは激しい戦いの末に全てを救っていった、しかし自分はそれが
できなかった

「……やっぱり、俺はニセモノってことか」

少年の嗚咽が荒野に虚しく響き渡る

「……もう……疲れたや」

そう呟くと彼は意識を闇へと沈める。

そして世界から青年が消えた……。

彼は番外だと、世界の破壊者は笑う。

九条誠一が目を覚ましたのは燃え盛る街の中だった

彼は困惑した、自身は荒野の上で倒れたはずだ。

それ以前に自分の世界には人類が残したありとあらゆる物は全て
消滅したはずだった

「……時間を遡ったのか？」

それは可能なことだった、彼が持ちうる「仮面ライダー」の力の一
つを使えばできることだった

「でも、俺が最後に「当てた」のは【鎧武】だからなあ」

ポケットから小刀が付いた黒いバツクル【戦国ドライバー】を取り
出す

その時だった。

『キャー——！』

遠くから女性の叫び声

それを聞いた九条は街を駆けていた

星の海の上、一人の少女は足で星を遊ぶ

「……たどり着いたかなあ〜?」

「……お前が『■■■』か……」

少女が振り返るとそこにはマゼンダ色の二眼レフカメラを首にぶら下げた青年が居た

「ああ、『世界の破壊者』か……どうだい、最近の旅は退屈してないかい?」

嘲笑う表情の彼女が気に入らないのか青年は顔を顰める

「なんで、奴を解放してやらない」

「分かっていることを言わないでくれたまえよ、門矢 土くん?」

「……捻くれた愛はお前も滅ぼすぞ」

「いいんだ、もう狂ってるから」

■■■の狂った笑い声が星の海に響き渡る。

「……しかしアイツは腐っても『仮面ライダー』だ」

それでも土は皮肉に染まった笑顔を返す

彼が訪れたのは一つの演目。

その名は……

特異点F 炎上汚染都市 冬木

運命は廻り始めた。

斯く云え彼らの禁断の立証が始まる。 第一廻 激動

私、藤丸立香は平凡な女子高校生である。

学校の成績は平均のちよつと上くらい、友人関係はあまり多い方ではないが親友と言える存在は居る。家族構成も両親と私だけという平凡な一世帯である……………

しかし、その私には『夢』と言える物は無かった。

なにも変わらない日常、段々と過ぎていく時間。無性に『抜け出したい』と思っていた。そして私の元に転機が訪れた。

『……………藤丸立香。はじめまして、だな』

そこに立っていた。夕焼けが昇り空に星空を魅せる誰も知らない場所で、彼に出会った。

『……………あなたは？』

『それは後で、教えてやる。今はもっと大切な話をしよう』

彼は草原に腰を掛け、私に隣に座るように催促していた。断る理由が無いので彼の隣に座る。

『……………なあ、お前って【夢】はあるか？』

唐突に彼が聞いてきた。

『……………ない、かな』

苦笑を浮かべている自分は彼にどう写ったのだろうか、彼は私の瞳をじつと見つめていた。

『そうか、……………実はさ俺も無いんだわ、【夢】。』

驚いた、彼にそれが無いってのはありえないそう思っていたからだ……………でもなんで私はそう思っていたのだろうか？

『なんでだろうな、夢は昔あったんだ。でも何かの拍子で壊れたんだ』彼の表情には哀しみが感じられた、それでも彼は笑っている。———なんで、なんで？あなたはいつも無茶して傷ついている、それなのになんで『笑って前に進める』の？

『……………難しいことじゃ無いんだわ、これが。俺はただ単に俺を支

えてくれた《仲間》がいただけなんだ、だから怖くない、だから笑える。大切なのは《自分の道》を信じるだけなんだ』

彼はそんな風に穏やかな笑顔で私を見つめた。彼の瞳は真っ直ぐに私だけを見ていた。どれだけの時間が流れたかは分からない、彼は一息付けて立ち上がった。

『お前は、お前の信じる道を行け……立香。』

『待って!?!行かないで!!』

彼の身体が段々と薄くなつて消えかけている、手を伸ばせば届く距離なのに身体がその場に固定されたかのように動けない。

『カルデア、そこにお前の進むべき道がある。けど気をつけろ、お前が進む道は茨の道。ずっと戦い続けるだろう』

『待って、私を置いて行かないで!!■!!』

『それでも、お前は戦い、勝利しなきゃならない。でも大丈夫。お前は諦めずに誰かの為に戦うやつだからな』

彼は今にも消えそうなのに未だに笑顔を耐えささない、駄目なのは、私は、貴方を、まだ知らない!!

『ん?俺が誰かって?』

彼は私の様子から私の意図に察したようだ。彼は私に向かって、何かを差し出した。

「……通りすがりの仮面ライダーだ、よく覚えておけよ!!」

そこで私は目を覚ました。

○○○○○
♠○○○○○

なんで、私はそんな事を思い出したのだろうか。なんでこんな燃える街に立っているのだろうか？

人類史の観測・保持を使命とする『人理継続保障機関』、カルデア。

2015年、何の前触れもなく観測されていた未来領域が消失。計算の結果、人類は2016年で絶滅する事が判明——いや、証明されてしまう。

そこで集めたのがサーバントを使役するマスター資格を持ち、特異点へレイシフトできる四十八人のマスター候補生達、その中に藤丸立香はいた。

彼女は「素質」だけの素人だったが、数合わせの一般公募によってカルデアにやって来た。

初日にして所長オルガマリー・アニムスファイアの演説中に居眠りしてしまって、ファストミツシオンから外されてしまった。

しかし、そこが運命の分け目であった……………

レイシフトの実験中に原因不明の爆発事故が起きる。立香は自分の事を先輩と呼ぶ、少女マシユのことが頭を過る。彼女を探しに燃え盛る炎と瓦礫を乗り越えて、そして見つけた——いや、遅かった。彼女の身体半分は瓦礫に埋まって、血の湖の上に横たわっていた。

——あれは、もう助からない。

直感的にそれを理解した。立香は運命を恨んだ、この少女は青空も見たことも無いのに死んでしまうことが立香には許せなかった、でもそれと同時に自分の無力感を叩きつけられた。だから、少女の弱々しい手を握るしかできなかった。そして、次の瞬間光に呑まれた……………目が醒めるとそこは燃え盛る街のど真ん中であつた。そして、死んだと思っていた彼女マシユが巨大な縦を携えていた、とうやら『ナニカ』と契約して英霊の力を手に入れ『デミ・サーバント』になったらしい。

——良かった、生きてた

安堵もした束の間、遠くに叫び声が聞こえた。助けに行かないと私たちは走り出した。そこにいたのは竜牙兵と呼ばれる魔物に襲われかけているオルガマリーだった。



——何故こんな、記憶が私の頭の中を行き交うのだろうか？

藤丸立香の世界にはあまりにもスローな時間が流れていた。眼前に迫る鋼の刃が自身の首元に伸びている、横目で見ると必死な形相で手をこちらに伸ばすマシユの姿。

——あ、いまのが走馬灯って奴か……………

理解は早かった、後ろに迫るサーバントに気付かなかった自分の落ち度をただ嘲笑った。諦める事しかできなかった。ここで都合よく誰かが助けてくれるわけがない、これで終わり、心残りはマシユが自分が死んでしまったことで泣いてしまうだろうということだけ。

『お前は、お前の信じた道を行け……………立香。』

……………それでも、助けて欲しいのだ。

「たす、けて……………!!」

ブウウウウンツ!!轟音と共に現れたのは一つのバイク《サクラハリケーン》だった。敵サーヴァントを吹き飛ばし、それは私達の前に舞い降りた。

「な、バイクツ!？」

私の後ろで所長が驚いた声で叫んだ。それは私も同じであった。でも、私は彼を知っている。

「……………おい、お前らか？この街を壊したのは」

バイクから一人の青年が飛び降り、青年は先程の吹き飛ばした長腕のサーヴァントを睨みつける。

「……………ダトシタラ、ドウスル」

「……………ぶつ潰す!!」

青年は黒いバツクルを腰の真ん中に当てる、バツクルはベルトとして自動的に腰に巻きつけられた。そして、右手にオレンジの形を模した錠前を構えた。

「変身ツ!!」

《オレンジ!!》

謎の電子音が鳴り響くと共に青年の頭上から空間が裂け、オレンジの鉄鋼物が現れる。青年はベルトに錠前をロックオンする。

《ロックオン!!》

それと同時に辺りに法螺貝の壮大な音楽が鳴り響き、そしてベルトに付属されている小刀を下に振り下ろす。

《ソイヤツ!!》

《オレンジアームズ！花道オンステージ!!》

次の瞬間、オレンジの鉄鋼物がライダースーツの頭部にオレンジ色の果汁を撒き散らしながら収まり、花が開くように鎧が展開されていく。

かの戦国武将をモチーフとした仮面のフルーツ鎧武者。

——その名は!!

《仮面ライダー鎧武・オレンジアームズ》

「こっからは、俺のステージだツ!!」

今、カチドキが鳴り響く……………!!

第二廻 鎧武

九条誠一は知っていた。

この眼前に立ち塞がる敵を何となく理解していた、斯く言う彼もそれに『近い』存在であるからだ。

この街の悲惨な状況に彼の中の一種のジレンマが呼び起こされた、それによりとても腹立たしく感じた。愛用のバイク《サクラハリケーン》で駆けるその街の光景が懐かしく思えてしまった。

——ムカつく。

彼は激昂していたが、しかし頭の中ではとても冷静沈着であった。彼が最初に考えたのは敵の『解析』だった、彼が戦闘において最も重要だと考えているのは敵の『存在証明』だと思っている。九条が存在していた『世界』では多種多様な化物、即ち怪人と一日中戦っていたのが嫌な記憶だ。

しかし、運が良かった。と九条は安堵した

何しろ今戦っている敵は初めての相手だ、相手がどんな戦い方をしてくるか分かったものじゃない。だからそんな状況にも即座に対応できる《鎧武》の力が今回の週で引き当てたのは、幸運と言ってもいいだろう。

すると無意識に戦わせていた現実の自分がアームズウェポンの《大橙丸》で長腕の男を上から下へと切り裂いた。

「危ないッ!!」

盾を持った女が叫ぶ、知ってる後ろから襲おうとしてる奴のことだろ？すでに認識済みだ。九条の行動は早かった。左腰に装備されている《無双セイバー》を引き抜き、それを自身の脇を通るように後方に突き出す。硬い肉の感触、確実に当たった事を確認し、背後に居た長身の半裸の男を長腕の男の方に蹴り飛ばす。

——決めるか

想定はできた、後はさっさと終わらせるだけだ。九条はオレンジの刀身の小刀《大橙丸》と《無双セイバー》を合体させ、《無双薙刀》に変化する。そしてベルトにロックオンさせていたオレンジロック

シードをオープンした状態のまま取り外し、そのまま《無双ナギナタ》に取り付ける

《イチ、ジユウ、ヒヤク、セン……………》

電子音がカウントダウンを始めた、『大橙丸』にオレンジ色のエネルギーが注がれるのがわかる。男たちは本能的に何か危機を察したのか撤退をしようとする。しかしそれを簡単に逃がすわけには行かない。

九条はナギナタの《無双セイバー》からオレンジのエネルギー体を吹き飛ばす。それに捕らえられた男たちはなんとか抜け出そうと足掻くがそれは無意味になる。

《オレンジチャージ!!》

「そりゃあッ!!輪切りにしてやるぜッ!!」

《大橙丸》にパワーが充填された、それと同時に九条は男たちの元走り出した。そしてオレンジのエネルギー体ごと男たちを……

斬ッ!!斬ッ!!と切り伏せた。

次の瞬間、男たちは光の粒子と成り、空へと還っていった。

「……………さて、色々と話してもらおうか」

そう言っただけで彼女らの方へと向き直った。

●●●●●?

『……………現在、カルデアは機能の八割を失っています。残されたスタッフだけでは出来る事が限られています。なので、こちらの判断で人材はレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に割いています』

ドクターロマニが虎視眈々に言う、それを真剣な表情でオルガマリー所長が聞きやる

『外部との通信が回復次第、補給を要請し、カルデア全体の立て直し……………と言った所でしようか』

「結構よ。わたしがそちらにいたとしても同じ方針にしたでしょう……………はあ。ロマニ・アーキマン、納得いかないけど、私が戻

るまでカルデアを任せます。私たちはこのままこの街……………特異点Fの調査を続けます」

『ウエ!? 所長、そんな爆心地みたいな現場、怖くないんですか!? チキンの癖に!』

「……………ほんつとうに、一言多いわね貴方。帰りたいたいのには山々だけどレイシフトの修理、時間がかかるんでしょ? それにこの街にいるのは低級の魔物と言うのは分かったし、デミ・サーヴァント化したマシユがいれば安全よ……………それに、ね」

所長が横目で彼を見やる、彼はバイクに寄っかかってこちらを見ていた。

「……………ねえ、アンタ名前なんて言うのよ?」

「……………九条、誠一。」

「と、言うことでこの九条誠一も協力するからなにも問題ないわ」

所長が誠一なる青年を指を指し、ロマンに告げる。ロマンは一瞬呆気にとられたが、すぐさま驚きの表情に変える。

『しよ、所長!? なにを考えているのですか、彼は現地の一般人ですよね!? 魔術の魔の字を知らない子を戦力として入れるのですか!』

「それに関しては問題ないわ、彼は魔術を一切使わずサーヴァント二体相手に圧倒し撃退したわ。戦力としては申し分ないはずよ」

『……………彼、実はサーヴァントなんじゃないんですか? 生身の状態でしかもサーヴァント二体を倒したなんて、並の魔術師には真似できませんよ』

「……………俺はその《サーヴァント》って奴じゃないし、死んだ覚えもない、それに《偉業》を成したことも無いしな」

「……………にしては、身の丈の合わない《力》を使うわね?」

疑いの眼差しを向ける所長に、知るかといって誠一は身体の凝りをほぐすように背伸びをする。

「……………ということで、藤丸立香、マシユ・キリエライト、九条誠一ら三名を特異点探索員と任命します。……………あとのことは任せたわよ、ロマン。」

『あ、はいわかりました。ご健闘を願います……………』

その言葉をあとに口マンの声は途切れた、訝しげそうにため息を付き所長は誠一を睨みつけた。

「………………。取り敢えず、今のところはあなたは力を貸してください。『協力者』として扱うけど、その後は………………。覚悟はしときなさいよ」

「………………。肝に銘じとくよ、所長さん。」

険悪な空気があたりを凍りつかせた様に感じた、少しの間睨み合っていた二人に仲裁の仕様のない私達は何がなんだかよくわからなかった。そんな私達の事を察したのか所長さんがこちらに来るように手招きする。

「あの、なんででしょうか所長…………。」

「いいから、黙って聞いて二人共。」

真剣な声音で囁く様に耳元で話し始めた、少し混乱したがすぐさま私は聞き入り込んだ。チラチラと誠一の様子を観ている、誠一は辺りを見渡しているようだ。

「…………。イイ、二人共。アイツはあんまり信用しないで」

「え、どうしてですか所長。彼は先輩の命の恩人ですよ」

「…………。よく考えて、マッシュ。カルデアが人為的な破壊工作によって、現在の機能の八割が停止されていること、そして未だにその犯人は分からない、そこに現れたアイツ。なにが何でも出来すぎよ。」

「で、でもあの人が犯人だと決めつけるはおかしいですよ。それ以前にあの人は、九条さんはカルデアにいなかったじゃないですか、それだったらどうやって九条さんが爆弾なんて仕掛けられるんですか!？」
「…………。アイツが使っていた魔道具?みたいな物を使った時、空間が裂けて鎧が現れたわよね?」

「そういうえば、なんか《オレンジ!!》とか言って頭上から鉄のミカンが出てきた。とてもシユールで少し呆気に取られたけど」

「それが、どうしたのですか?」

「それが問題なのよ、アイツは一切魔力を使わず、空間移動の力を使った。それはつまりカルデアでも察知できないような未知の異能。それを使えば誰にも気づかれず破壊工作をすることはできるの…………。」

未知の存在、それだけで誰かを疑うのだろうか。憤りが拳に集まる、たとえば彼がカルデアを襲った張本人だとしても私はどうしても彼のひたむきな瞳の奥に燃える熱い思いが嘘だと思えない。

「おい、そろそろ行くぞ。奴さんがそろそろどこっちに向かってきている」

彼が指差す方向には先程の二倍はある大量の竜牙兵だった、流石にあの量は捌ききれないそう私達は判断し、その場から走り逃げ去った。私は、後ろから着いて来る彼を見やって何かを安心させようとした。

第三廻 協同

「ハアハアハア……どうやら、撒いたようね」

竜牙兵達から逃走し続け、私達は海岸沿いの遊歩道へと辿り着いた。流石に長い距離走っていたので息が上がる、マシユの隣で私は地面に腰をつける。

「……………ほれ、早く立て。次が来ないっていう可能性は無いんだから」

……………なんで、九条さんはあんなに走ったのにピンピンしているのだろうか。あれか、この人は元オリンピック選手なのだろうか？

「ハアハア……………、貴方は、…何故疲れてないんですか？」

「無駄に鍛えているからな」

「デミ・サーヴァントでもあるマシユの体力を超える程の鍛え方なんかあるかッ!？」

ヒステリックに叫ぶ所長を知らん顔で九条さんは海岸の方へ振り向いた。息を整えるには数分もあまり掛からず、私達は再び特異点の探索を続行した。

「そういえば、九条さん」

「……………なんだ？」

隣を歩く九条さんは訝しげな表情を見せていた。……………それほど私と話したくないだろうか？

「……………え、えつとですね。その、バイクはどうしたんですか、さっきの所に置いてきちゃいましたよね？」

九条さんは首を傾げたがすぐさまに何かを納得した表情をした。するとポケットに手をつ突っ込み何かを探すように漁っていた。マシユがその様子を見て九条さんを睨みつけていた。

「これ、バイク。」

簡単な二言、九条さんが私に突き出したのは大きな黒い錠前、中心には桜のシンボルが刻まれていた。冗談でしょ、疑いの視線で九条を見やるがその表情は至って真剣なものだった。

「……。それがあのバイクなんです、か？」

「冗談だと思ふなら開けてやろうか、その時お前はバイクの下敷きになるがな」

それには丁重にお断りした、しかしそういう技術力をこの人はどうやって手に入れたのだろうか……。ますます疑惑が深まる。そんな思いで話が進む中、息を整えたのか所長が九条さんとの距離を詰めた。

「……………アナタ、聞いてなかったけど。あの力は何なの、正直な意見アナタはとても怪しいのよ。もしあなたがカルデアを襲った張本人だとしたら……………我々は貴方には対して全勢力を以って、排除するわ」

敵意と疑惑の意志が所長のその声音で解った、マシユが武器を構え、戦闘態勢を取る。

……………沈黙が痛い、居た堪れない感情が心を巡る。九条さんは呆れた様に頭を搔く、そしてその口を開く。

「……………《鎧武》」

「《鎧武》？それがあの力の名前なのね、それじゃああの錠前はなんなのよ、それに錠前を使った時に空間が裂けたその先の森みたいのはなんなの？」

ガンガンと質問を繰り返す所長に対して嫌そうな表情で対応をする九条さん。

「錠前は《ロックシード》、種類は豊富で《ロックシード》によって異なる武装が出現する。しかし《ロックシード》単体では効果は無い、この《戦国ドライバー》を使わなければ使用もままならない」

九条が見せてくれたの小刀が付けられていた黒いバックル。所長は不思議そうにあちこち触っている。

「《ロックシード》は《森》に実になっている果実を筆るとドライバーの何かしらの力が作用してできる、詳しい原理はよく知らん」

「《森》？どこの森かしら」

所長のその質問に九条さんは言葉が詰まってしまふ、でも私は見ていたその時の九条の表情を。憎しみと哀しみの混じった苦しみの表

情を。

「……………」。《ヘルヘイムの森》」

「《ヘルヘイムの森》? 『ヘルヘイム』と言ったら、北欧神話の死者の国の名前ですよね?」

「その森に有る果実は普通の人間が食べてしまうと、身体全身の細胞が一気に変質し、【インベス】というバケモノになってしまう。」

「【インベス】? つまり、この特異点の異常はその【インベス】が原因なのですね?」

「それは違う」

「?。それはどういう事?」

「俺が全部、皆殺しにした。」

端的に、それも理解しやすく彼は言った。九条さんの話す素振りがあまりにも無感情過ぎて、恐怖を覚えてしまった。隣のマシユも所長も皆が息を呑んだ、得体も知れない恐怖だけが体の芯を少しずつ貪っていく。その時私は失禁しかけてしまった、しかし何とか女の子の尊厳のためにそれを断固として阻止した。

「……………だから、アイツらがここにいるわけが無い。それに【森】自体、全く別次元に存在するからこの世界に干渉してくることはもう絶対ない」

機械的で冷たい瞳が逸らされ九条さんは再び私達の前を歩き出した。声なんて掛けられなかった、私の本能がアレに触れてはならないと警鐘している。だから私は一歩下がった所を歩き始めた。



ーークソ喰らえ。

悪態をつかずにはいられない、後悔の念が九条誠一の頭の中を満杯する。信用されていないことは知っていた、それは得体の知れない力を持ったやつを怪しまないのがおかしい。

自分も彼女らのことを信用しているわけでは無かった、けれども彼女らと共に行動する事でこの異変が収まるのであれば、それは止む終えないと判断した結果これだ。

『死にたくない、死にたくないよオツツツツ?!』

頭の中でフラッシュバックする戦いの記憶。それを振り払うように首を振った。ここから見える燃え上がるような赤い光が街を包み込んでいるのがよくわかった、似てるのだこの景色は。

《世界》が終わる景色に。

立ち上がれるだろうか？再び。その答えは誰も答えていけない、結局自問自答の道。彼が選んだのはそういう道だ。誰もが通った道、先輩方が歩んだ過酷な世界、だったら行ってやろうじゃないか。意気込み、そして握りしめる。

「これ、なんだろう？」

藤丸の声が入った。どうやら景色を見ながら歩いていたら立ち止まっていたようだ、鎖だ。道を阻むように鎖が編み込んだ蜘蛛の巣のように張られていた。藤丸が不思議そうに手を伸ばす。

ーーヤバいッ!!

本能的なものが危機を知らせた。鎖が捕まえようと藤丸目掛けて伸ばしていた、一瞬の内に藤丸の服の襟を掴み後ろに放り投げる。その代わりに自身の右腕に鎖が食い込む。

ーーッ!!

捉えられた瞬間、ものすごい力が自分を喰らおうと引っ張ってくる。脚に力を入れてなんとか踏ん張るが、それでもズルズルと引き込まれる。

「九条さんッ!？」

「来るなッ!!お前も引き込まれるぞッ!!」

不要に近づいて来ようとする藤丸に怒号を飛ばす、たじろぐ藤丸を他所に腕の肉に食い込んでくる鎖が血管を破壊した音が聞こえた。激痛、腕を伝って赤い血——いや、緑色の血がコンクリートに零れ落ちる。

「なに、それ」

オルガマリーの動揺が声になって伝わってくる。

『おや、どうやら獲物を一匹捕らえたと思つたら……見慣れない《人外》を捕らえたようですね』

心の奥底まで囁かれている様な悪寒が体を駆ける、全員がその発生源を見つげ出した。

「嗚呼、見知らぬマスターに見知らぬサーヴァント。そして……見知らぬ人外、なんて瑞々しい。」

黒いローブを纏った長身の女性、その手には鎌のような形状の槍が収まっている。只者ではないその身から発せられる存在誇示は人のそれとは比ではない。しかし、誠一が注目したのはそこではないその背後にある無数の石像だ。遅れて藤丸もそれに気づいた。

「てめえ、その後ろのやつはなんだッ!？」

九条は叫ぶ。答えは目に見えている、しかし問うのだ答えが出た瞬間怒りで痛い思いをしないために。盾を構えているマシユの後ろに居る藤丸も同じ様な目をしていた。

「——……《人間》ですが何か?私の領域に入った獲物をどうしようとするの勝手でしょッ?」

瞬間、近くにあった石像の人間の頭を弾き飛ばした。

「あ?」

藤丸の間の抜けた呟き。石像からは無くなった頭に送る血液が噴水の如く、燃え盛る街に飛び散った。

「一つ、無くなってしまうましたが……どうやら新しく四人はいるようですね」

「てめえツツツツツツツツツツツ!!」

怒りの爆発力が九条を動かせる。その怒号は街に響き渡り、地面を揺らした。驚愕の表情が藤丸たちに浮かんだ。それもそのはず、九条はその一瞬で捕らえた右腕を自力で引きちぎったのだ。緑の鮮血が辺りを舞う、無くなつた右腕は熱い何かを感じた。

純粋な怒りが九条の脳内のドーパミンを大量に排出している、九条の痛覚を一時的にカットしていた。全ての目に映るもの全てがスロームーシヨンの世界になる、その中を行くのは九条ただ一人だった。

疾走る、走る、奔る。不敵な汚い笑みを浮かべているこいつを殺す!! 左腕で《戦国ドライバー》を装着させ、掌から《オレンジロックシード》を出現させる。

「変身ツ!!」

《オレンジツ!!》

九条の頭上からクラックが出現、現れたのはオレンジの鉄鋼。

《ロックシード》を《戦国ドライバー》にロックオン!!

《ロックオンツ!!》

《ソイヤツ!!》

《オレンジアームズ!!花道オン・ステージツ!!》

花開くように鎧が展開されていく、次の刹那には九条はアームズウェポンの《大橙丸》で斬りかかった。しかし女はその手にある槍で受け止めた。

「なんて初々しい、瑞々しい。あなた達、サーヴァントと戦うのは初めてかしら? なら先輩として色々と教えてあげましょうツ!」

九条の攻撃を受け止めた槍を女サーヴァントは押し返し、九条を藤丸の下に吹き飛ばす。

「九条さんツ!!」

「うっせえ!! ちゃんと前を見ろ!!」

「応戦します、先輩指示を」

「言論には気をつけなさい、『する』と言ったからには

もう、すでに『行為』は始まっているのですからツ!!」

瞬時に女サーヴァントが加速する、それに即座に対応した九条はマシユの前に出る。左手の《無双ナギナタ》で女サーヴァントの攻撃を捌いていく、しかし。

「左手だけでは、戦闘もままならない様ですネッ!!」

「ぐっ!!」

「ッ!!九条さん!!どりゃああッ!!」

力及ばず吹き飛ばされた九条、入れ替わるようにマシユがお得意の盾で突進を仕掛ける。しかし、激突する前に女サーヴァントは回避し、後退する。怪訝そうな表情の女サーヴァントが顎に手を当てて、暫し考える。

「……………瑞々しいのも癩に障りますね」

女サーヴァントが紫の髪の毛をたくし上げる。するとそれは蛇の形をもち、次の瞬間藤丸達を囲う一つの檻と化す、逃げ道を完全に絶たれた瞬間だった。見下ろすように鎖の上から女が嘲笑う。

「このままでは不利です、先輩逃げてください」

「えっ!マシユを置いてなんか行けないよ!!」

「纏めて私の髪で絡め取ってあげましょう!!」

絶望的な状況、右腕しかない自分、戦闘不慣れのマシユ、戦う覚悟もできていない藤丸、戦う技術はあるが膝が笑っているオルガマーリ。

覚悟した、自分の死ではない。《禁断の一片》を使うことに対してだ。いつの間にか握られていた黄金の鍵を強く握りしめた、その瞬間。

『小僧はまともに動けないで小娘は未熟だが、中々の兵たちじゃねえか。これじゃあ助けられない道理はねえな』

何処からか声がした、援軍かと思ったが女の慌てた様子を見ると違うようだ。

「何者です!?!」

「何者って、オイオイ忘れちゃったのかよ同郷!!」

現れたのは青いローブを着た青い髪の爽やかな青年、その手には木

製の杖を携えていた。不敵に笑う青年に対して女サーヴァントの表情が一転し自分の旧来の憎敵に出会ったような目をしていた。

「キヤスター、何故漂流者の肩を持つのです!？」

「ああ？決まってるんだろ、お前らよりマシンだからだ!!」

瞬間、キヤスターが空中でなぞった文字が特大の炎へ変化し女サーヴァントに轟ツ！と直撃する。咄嗟のことに対応しきれない藤丸の前に降り立つキヤスター。

「讓ちゃん、アンタは腕は未熟だが意気込みは負けてねえ。気張っていけ！」

「は、はい！」

「坊主！女を守るために腕を差し出したのはイイ判断だが、その珍妙な力をまだ出し切ってるねえだろ？もつと本気でいけ！」

見破られていたようだ、なんとも気の抜けない奴だ。と感嘆する自分がいた。そしてキヤスターは次に藤丸を横目で見た。

「アンタがマスターか、故あって奴とは敵対中だね……敵の敵は味方って言うしな、仮契約だが俺があんたのサーヴァントになってやる。指示をしな」

「え、でも……」

「讓ちゃんのマスターなら、覚悟をしろおツ!!」

戸惑う藤丸にキヤスターが喝を入れる、盾を構え勇敢にも立ち向かうマシユの姿が何かを琴線に触れたのだろうか藤丸は後退しかけていた足をザツと前に繰り出した。その表情には先程までのような弱々しい藤丸は居ない。

「……………こういう時なんて言うのかな、そう『こつからは俺達のステータジだツ!!』」

《イチゴ!!》

頭上からチャックが開くような音がし、クラックが開封される。現れたのはイチゴの形の鉄鋼。九条の左手にはイチゴの形を模した錠前が解錠されていた。そして《オレンジロックシード》を外すと同時にオレンジアームズが霧のように霧散する。

《ロックオン!!》

《ソイヤツ!!》

ベルトの法螺貝の音楽を待たず、カッティングブレードを降ろす。イチゴの鉄鋼は九条の頭に覆いかぶさり、花が開くように上半身に鎧が展開される。特徴的な右肩のイチゴの緑の葉。その手には《イチゴアームズ》のアームズウエポン、《イチゴクナイ》が握られていた。

《イチゴアームズ!!》

《シュシュツと、スパークングツ!!》

『鎧武・イチゴアームズ』

それが今の鎧武の名前だ。

「つて、イチゴツ!？」
「今更だろ」

第四廻 かつてのモノ

「初めは原点自体見えない虚空と幻想から生まれた」

「1971年にすべてが始まった、『昭和』」

「そして、今へと繋がっている」

「『平成』という名の今に」

「平成の一周期の締めくくりは『世界の破壊者』だったように」

「また、『平成』は終わろうとしている」

「そう、世代交代というやつだ」

「しかし、違えてはならない」

「『彼』はそれはない、伝わるものは何も無い」

「正しくは、何も『彼』は受け継がれていないと言う訳だ」

「それもそうだ、彼は『騎乗者』^{ライダー}では無いのだから」

「それでも、アイツは俺らのように進む」

ライドブツカーの引き金を引く音ともに弾丸が発射された。

—————

「ほぎけっ!!」

姿を改にした九条の啖呵を聞きすぐさま女ランサーは髪をかき揚げ巨大な鎖の塊として叩きつける

それを横に回避し、キャスターと共に走り出す。

「喰らえっ!!」

九条がイチゴアームズのアームズウエポンの『イチゴクナイ』をランサーの眼前に投げつける。

「無駄あ!!」

「こっちも構ってくれよ!!同郷!!」

鎌の様な槍でイチゴクナイをはたき落とされた同時に青髪のキャスターがルーン文字を操り豪炎を叩きつける。

「ッ!？」

咄嗟のことだったのか直撃を免れぬと察し、右腕をガードに使った。そのお陰で右腕以外は無傷であった。

《ロックオン》

《イチゴチャージ!!》

しかし、九条はそんなこといざ知らず。無双セイバーにイチゴロツクシードをセットし、空中へと巨大なイチゴクナイのエネルギーを飛ばす。

「クツ、させるかアッ!!」

それに危機を感じ取ったランサーはそれを撃ち落とそうと鎌を振るう。しかし、イチゴクナイのエネルギーは分裂しイチゴクナイの雨が降り注ぐ

「グワアツツ!!」

さすがのランサーでも直撃は免れなかった様だった。

「……………やったか?」

「いやまだだ、小僧!!」

瞬間、砂煙の中から槍が九条の心臓目掛けて飛んできた。九条は刹那の出来事に対応が追いつかず回避行動が間に合わなかった。

「クツ、ちゃんとやれえ!!」

キャスターの怒号が耳によく響き、九条の体はキャスターが横へとふっ飛ばし強制的に回避させた。しかし、そのせいでキャスターの胸に黒い槍が突き刺さる。

「あ、青髪イイイイツ!!」

「キャスターさん!？」

「叫ぶ暇が有るなら、さっさと決めろオ!!」

再びキャスターの怒号がマッシュ達に飛ぶ、キャスターの覚悟を察したのか九条はイチゴロツクシードを手早くパインロツクシードに切り替える。

《パインアームズ 粉碎! デストロイ!!》

「盾え!! 上げろお!!」

「!、了解!!」

マシユは九条の意図を察し、自身の盾を奔ってくる九条の方に向ける。九条は盾を踏み台に空中へと飛び出した。

《パイソール!!》

カッティングブレイドを二回振り下ろし、九条は『パイソール』を空中で蹴り、バイナツプルのエネルギーがランサーたちを拘束する。九条はそのまま蹴りの姿勢に入る。

「は、離せ!!」

「いや、無理だね。俺でも抜けられないんだからよ」

「セイハツ……」

掛け声とともに九条は右足に黄色の果汁の様なエネルギーを纏い、ランサーと激突する。

バゴオツツツツツツツ!!!

衝撃とともに爆発が起きる。その中でランサーが穏やかそうに光になるのを藤丸は見ていた。

—————

「おい、大丈夫か!!青髪!!」

変身を解いた九条は倒れ伏せるキャスターに駆け寄る。ニヒリと笑うキャスターが九条を待っていた。

「ツ………おい、シャツキしろよ!」

何となく九条は分かってしまった。キャスターが見せた笑顔は幾度も見た逝く前の表情だと言う事に。そうキャスターは九条を庇つたせいで死ぬのだ。

「……それはこっちのセリフだけ坊主、お前がどんなモノだろうがこの先あの譲ちゃんを護らなきゃならないんだぜ。そんなお前が、そんなんじや満足に任されねえよ」

「………分かってるさ、だからこそー」

「それに、俺は英霊だ。また召喚すればまた会えるさ………。それまで」

「任せろ、こんな程度の異変何度クリアしたか………。ノーコ

ンティニューでクリアしてやるぜ」

「それだ、その勢いだ。英霊と負けず劣らずの覚悟だ」

「キヤスター!!」

そこに藤丸たちがやってきた、藤丸はキヤスターの様子を見て顔を苦しそうに歪めた。きっとキヤスターが長くないことに気づいたのだろう。

「讓ちゃん、アンタはこれからこの異変の核と戦うことになる」

「あなた、この異変の原因を知ってるの!？」

「そうだけ。奴さん、セイバーは水を得た魚のように暴れまくった。その挙句聖杯を手に入れてこの土地、いやこの世界を聖杯の泥で沈める気だ。そしてそれを止めようとした。ランサー、アーチャー、ライダー、アサシン、バーサーカー、全員が倒され泥に汚染されちまった。結果、さっきのランサーよろしく、暴れまわるようになった」

「そのセイバーは、一体?」

息を呑みながらキヤスターに問うオルガマリー。

「……………聞いたことあるだろ、王の裁定、岩の剣の二振り目。」

「それって!!」

「そう、最強の幻想。『聖剣エクスカリバー』つまりセイバーは騎士王『アーサー王』さ」

それを聞き、オルガマリーは絶望の表情を浮かべ地面に膝を付ける。

「……そんなの、勝てるわけないじゃない!?!」

「でも、やるしかねえんだ!!」

オルガマリーの嗚咽をかき消すように九条が叫ぶ。オルガは九条の顔を見る。九条の表情は強く熱く覚悟に満ち溢れた顔だった。その意志を感じ取ってか藤丸がキヤスターの手を両手で強く握りしめ、見つめた。

「……だいじょうぶ。私達が人類の『最後の希望』になるよ」

その言葉にキヤスターは一瞬呆気に取られたがすぐに笑顔を見せた。

「……全く、女はいっだって恐ろしく強くなりがるな」

やれやれと言わんばかりは表情のまま、キャスターは宇宙へと光と成り消えていった。

「……………、うおおおおおおおっ!!!」

唐突に九条が叫ぶ。ズカズカと九条は落ちている右腕の元へと歩きそこらへんの廃材を刺し右腕に無理矢理に接着する。まるで怒りを痛みで紛らわすような姿は藤丸達に痛々しく写った。

—————

「……………キャスターが逝ったか…」

「そのようだ、所詮犬畜生だということだったただけだ」

黒い鎧の少女が深く呟くと白髪の青年が皮肉そうに言い放った。

「しかし、アレはなんだ？この世とは思えない、体にしても『力』にしても……………」

「……………《仮面ライダー》か…」

「知っているのか、アーチャー」

怪訝そうなアーチャーの様子を見て、セイバーは問うた。

「……………ああ、あれは。いやアレらは『害悪』の種だ」

アーチャーの脳裏に映るのは一人の猫舌の青年。世界中の洗濯物を真っ白にする夢を持っていた儂い夢の守護者のことを……………。

—————

私達はその後聖杯を探すためにあらゆる場所を巡りました。幾度も戦闘があり、その度に誠一は変身し私達を守ってくれました。

いまは一息付けるため高校で休憩中です。

「どうしたの、マシユ？」

「あ、先輩。いや少し空を見て……………」

学校の廊下で空を見上げているマシユに声をかけると私の方に笑って見せた。私も空を見上げて見るが分厚い雲に覆われていてどんよりしていた。

「空が、どうしたの？」

「いえ、此処はカルデアより低い位置にあるのに『青空』が見えないなって……」

確かにと藤丸は思った、何かの力によって空は閉ざされているこの世界はあまりにも綺麗なものがない。むしろ目を背けたくなるものばかりだ、覚えたくないような人間だったモノが焼ける匂いと血の池。今も思い出すたびに吐き気を催す。

しかし誠一はそれらに目を背けることなく、前へと突き進んでいた。その姿はとても尊く哀しいモノだったことを抱かずにはいられなかった。

「先輩？」

「ん!?どうしたのマシユ？」

「いえ、何か物耽っていたのでどうしたのかと思って……」

「なんでもないよ、それよりマシユは『青空』が見たいの？」

私はその問を投げかけるとマシユは悲哀に満ちた表情を見せ、空を見上げた。

「……私は、私はカルデアで生まれ育ってきました。」

「あそこは、いつも暑い雲と吹雪で空が閉ざされています。」

「ですから私は幼い頃から、『普通』の人が必ず見るであろう『青空』を夢見ていました」

「いつもいつも、画面の『青空』を眺めて私は何度か思ってしまったのです」

『嗚呼、私は籠の鳥だと』

「だから、それを『夢』にしました。」

『『夢』は臍げで遠いモノだから諦められる、そう思っていました。』

「でも、先輩とこの時代に来て私、期待しちやっただんです。嬉しかったです。」

「不謹慎ですよ、自分の『夢』が叶うかもしれないからって『人類を救う旅』に私情を持ち込むなんて……」

「それは違うよ」

一瞬 マシユが哀しそうな笑顔がとても私には気に食わなかった。だから私も言うのだ、言ったのだ。

「マシユがマシユの『夢』の為に生きちゃいけない訳がない」

「それが『人類の救済』を目的とした戦いだとしても、マシユはマシユの為に戦っていいんだよ」

「人類を救うのはもちろん大切だよ、けどそれを理由に自分の『夢』を汚いモノだと一度だって思っちゃいけないんだよ」

「人は一度しか生きれない、夢を見れるのも叶えるのもたった一度だけなんだよ!!」

「勿体無いよ」

「もしマシユが、マシユの為に『夢』を叶えるのが罪だとしても……。」

一息空白を作る、これは覚悟のある言葉なのだから慎重に言わなきゃならないのだから。

「私がその『罪』、全部背負う」

「マシユの『夢』は私が叶えるよ!!」

マシユ・キリエライトは知った。この少女の覚悟と意志の強さを
.....

藤丸立香は覚悟した。これからどんな困難があろうとマシユと共に戦い抜くと.....

これより、この場で彼女らの『共犯者』が始まった。

—————

『この先だ、この先に大きな魔力が感知した』
通信機の向こう側のドクターが私達に告げる。

私達は今、冬木の洞窟の前へとやってきた。この先にこの事件の黒幕が居るらしい、いや居る。

「……………ドス黒い気配がビンビン臭ってきやがる」

険しそうに表情を浮かべる誠一の発言には私も賛同せずにはいられない。洞窟から黒い何かが溢れているのがなんとなくだが理解できた。マシユや所長も固唾を呑んでいる。

「……………行くぞ、ここにいても何も変わらない」

そう言つて誠一は私達の前をあるき出した、だがその瞬間誠一の足元に剣が飛んできた。それは一瞬にして形を留めず爆発した。

「誠一!!」

私はマシユの盾によって守られて無事だった。砂煙が段々と晴れていくと誠一が爆発地点から少し離れた場所からムクリと現れた。どうやら咄嗟に回避したらしい。

私は誠一が無事だと分かり一息つく。

「……やれやれ、さすがの『仮面ライダー』もこの程度では殺せんか」
男性の声。私はすぐ様振り返るそこには白髪の青年が赤い弓を番えていた。

「……アーチャーだ」

その結論に達するには簡単だった。しかし今このサーヴァントは『仮面ライダー』と言ったか!?

「……………テメエ、明らかに俺だけ狙いやがったろ。さつきから俺だけに殺気を飛ばしやがる」

「わかるかね?それは失礼をした出来ればそのマスターとサーヴァントを始末したかったが、いかんせん『仮面ライダー』が相手にいるのであれば優先的に狙うのは妥当だろ?」

皮肉げに話すそれは自信があつての言動なのだろう。マシユはさつきから警戒を強めているのがその証拠だ。

「……………藤丸、先行け。」

「ハアツ!?何言ってるの!?!誠一を一人で戦わせる訳にいかないよ!!」

「そういう問題じゃねえ、効率の話を言つてんだよ。それにアイツは

俺だけに用があんだとよ」

「……藤丸、行きましょう」

「所長!？」

「わかつてるじゃねえか、ビビリ」

「う、うっさいわね!!それよりあんたこそ勝ち目はあんの!？」

所長の言葉に不敵に誠一は微笑う。

「舐めんなよ、これでも『仮面ライダー』だ」

その宣言は何より信頼を置けるモノだと私はふと思ってしまったのです。そしてそんな考えを浮かべてしまった自分の不甲斐なさを実感した。

「……………頼んだよ、誠一さん」

「お、やっと『さん』を付けやがったな」

私達はそのまま振り返らず洞窟の奥へと走り出した。

—————

「さて、一丁いいかな。アーチャーくん?」

「……なんだ、手短にしてくれよ」

「いや、なに一つ質問するだけなんだよ」

何気ない態度で友人と接するように話しだした誠一。

「……お前、『本物』にあったのか?」

『本物』、それが指し示すものをアーチャーは理解していた。

「……………そうだと、言ったら?」

「……ハア、なんだアレだ。だから俺を狙ったのか」

少し面倒くさそうな様子で頭をかく誠一はこの時にアーチャーがしつこく自分に敵意を向けてくるのか理解した。だからこそ卑屈になつてしまっそうだった。

「俺は、異物か」

「当たり前だろ、貴様ら『仮面ライダー』は存在した瞬間から『悪』が生まれだすのだから。」

否定はしない。『仮面ライダー』が生まれる世界は必ずと言っていいほどそれに対抗するための『敵』が生まれるということになる。『仮面ライダー』が『悪』を作り出したと言っても過言ではないだろう。

「正直言って、この世界から出て行ってほしい」

「断る。見ちまった以上、俺が関わった時点で『お前ら』の負けだ。『仮面ライダー』ってのは……」

「……人々の自由と平和を守る戦士」

ニヒリと誠一が微笑う。

「わかってるじゃねえか、だったら分かるよな。」

「ああ、なら私も全力を持って貴様を潰す!!世界のために、《正義の味方》として!!」

お互いに引けない、二人は戦うべき存在だ。譲れない物のためにぶつかり合う。それはそれぞれの《正義》のカタチの在り方故に。どちらかが負けた瞬間それを砕くことになる、それはとても罪深いことだろう。

「……しかし……」

「ああ、それでも俺は『変身』するツ!!」

誠一は右手にオレンジロックシールド、左手にブルーのレモンエナジーロックシールドを構える。

アーチャーは黒白の夫婦剣を構える。

「『変身』 ツツ!!」

『オレンジツ!!』

『レモンエナジーツ!!』

今、ぶつかり合う。

救国を駆けるが竜騎士 第五廻 旅の始まり

彼との出会いはとある国の紛争地域で彼が一人で子どもたちの服を洗濯していた時だった。

彼の眼つきは何というかそこら辺にいるような不良みたいに鋭く、怪しき満点だったというのがはじめての印象だった……………。

『……………お前誰だ』

ふと彼が話しかけてきた。警戒しこちらを睨んでくる。俺はちよつとした自己紹介とここに来た経緯を掻い摘んで話した。

『……………お前、物好きだな。まあ俺も言えたことじゃないけど』

彼は自嘲するように言ってみせた、もしかして彼も同じように『人助け』をしに来ているのだろうかと思ひ質問する。

『そんな大層なもんじゃねえよ』

じゃあ、何のためにここに来た。

『……………夢なんだよ』

夢？

『そう、夢だ。俺は世界中の洗濯物を真っ白にするのが夢なんだよ、笑いたきや笑え。バカにしたけりやバカにしてろ』

馬鹿になんてできるわけが無かった。彼の瞳は覚悟に燃えている目をしていて。そんな瞳をしている人物を笑うことなんて許されないと自分の中で理解されていた。それ以前に俺も同じような『夢』を抱えている。

そんな彼の風貌に共感してか俺は彼に手を前に出していた。

君の名前は？

『……………乾巧だ』

愛想も無い声音で手を握る彼の様子はなんとというか少し可笑しかった。

彼との邂逅こんなものだった……………。

ソニックアローの斜線上に一瞬重なるアーチャーを見逃さず矢を放つ。しかし、アーチャーも同じように宝具を投影し、向かい撃つ。このような攻防がかれこれ十分以上は続いている。これでは埒が明かない、そう判断した九条は足早にアーチャーの元へと走り出す。木々を掻き分けてアーチャーへとソニックアローの刃の部分を押き込む。

「ぐっ!?!」

しかし、アーチャーとてやられればなっしではない。弓を捨てどこからか白黒の双剣でソニックアローの刃を凌ぎ、その勢いを利用し広々とした空間へと吹き飛ばす。

アーチャーが双剣を握りしめ九条を見据えて、微笑う。

「アーチャー誘ってるのか、まどろっこしいことは無しですか」

九条にはわかっていたアーチャーが誘っていることに。だからこそ行く、九条には時間が無い早く藤丸のもとへも行かねばならないのだから。

《チェリーエナジー!!》

九条はレモンエナジーを外し入れ替えるようにチェリーエナジーロックシードに切り替える。

《ソイヤツ!!ジンバーチェリー!!ハハッハー!!》

その風貌は戦国時代の副将のような袴で、チェリーの文様が刻まれていた。

「……………近接攻撃型か、高速移動型か。まあどっちにしる倒すがね」

見破られていた。ジンバーチェリーは高速戦闘型のフォーム。しかし、動揺はしない。相手は『仮面ライダー』に出会った存在だ。その程度は予想はできるだろう。

「アーナーあ、アーチャー」

「何かね、辞世の句なら聞く気は無いが」

皮肉タツプリの言葉を吐き出すアーチャー、九条は構わず言葉を続ける。

「……お前何が、『怖く』て『悲しい』んだ？」

「……何？」

突然の言葉に混乱するアーチャー。

「俺にはわからないんだ、お前がどうしてそこまで敵対してくるのかわからないんだ。だってお前は出会ったんだろ『本物の仮面ライダー』に」

「……。貴様何を言ってる……」

「はぐらかすなよ。『正義の味方』さん？」

「……」

「あの人たちは、俺が知っているあの人たちはお前にとって大きいものだ。それは絶対だ。それなのにお前は矛盾してるんだ、さっきだって藤丸たちを先に行かせる満々だったろ、なのに俺だけは絶対通さないそれどころか殺す気。訳がわからねえ」

「俺が『異物』で世界に害悪を齎す。しかしそれだけじゃ殺す意味にはならない、それに『仮面ライダー』は害悪を齎すが同時に世界を救い出してきた」

「それはお前にとって都合の良いものだろ。なのに狙ってくる。」

「お前は『世界』が救われるのを望んでないのか？」

決定的な言葉、確信と言っている真実。九条はそれを既に持ち合わせていた。アーチャーが自嘲する、自身の矛盾に噛みついて今更気がついた意志。それはアーチャーの表情を苦しめるものに変える。

「……そうだ、そうなんだよ。ほんとに訳がわからなくなる、矛盾だらけではないか!!」

瞬間、アーチャーの姿がぶれる。九条は咄嗟にソニックアローを構

えるがアーチャーの夫婦剣によつて弾き飛ばされ、九条は腹部を切り裂かれた。

「ぐっ!?!」

『理想』を再び誓つたのに、それに反する事をしている自分が情けない、情けなくつて堪らないっ!!」

それだけでは終わらない。双剣の追撃は留まることを知らず。連撃の如く叩きつけられる。さすがのアームドでもこの攻撃は耐え難い痛みを通していた。

「なぜなんだ、ナセなんだ!!なぜ彼が死ななければならなかった!!なぜ……………『世界』は彼に残酷なんだ?」

悲痛の表情を見せるアーチャー、《正義》を持ちながら《世界》を憎む彼の姿はとても痛々しいものだった。九条は八つ当たりにも近いその行為を甘んじて受けていた。変身は解け地面を転がる。

「……………なあ『仮面ライダー』、何故、ナゼ彼は『乾巧』は死ななければならなかった?彼はナゼ自分の為に生きてはならなかった。」

「彼は世界を幾度も救つた《正義のヒーロー》だろ、その彼がナゼ、何故——」

『あんな、悲劇があつていいのか?』とか言うんじゃねえぞアーチャーッ!!」

アーチャーはハツと九条を見る、九条の表情は怒りに狂つた表情をしていた。怪我を庇いながら九条はアーチャーを睨みつける。

「……………あの人は、『オルフェノク』だ。いつかは死ななければならなかった「ならっ」黙れ。それ以上は許されないぞ、憐れむことはあの人の遺志を貶す事になる」

ぐつと息を呑むアーチャー。

『四号事件』あれは誰の記憶にも残らず忘れ去られてしまった戦い。でもあれは、あの戦いを悲劇とは言わせない。いや言えない!!」

「あの人は、変えたんだよ。ハッピーエンドにやってのけたんだよ!! 自分の命を投げうつても、消えてしまう《正義》だとしても、アイツは、乾巧は戦って勝ったんだ!! 『死という現実』にッ!!」

たとえ何度時間を繰り返そうと乾巧達は戦った。残ることはない歴史だとしても、ただ……………。

誰かの祈り、夢を護る為に……………。

「……アア、そうか俺は、『怖かった』のか」

アーチャーの瞳から哀しみの雨が流れ落ちる。

彼は何度も立ち上がって行くうちに恐れたのだ。

……いつか、自分のしたことが意味のないものになっていくのが。

正義の味方は所詮人間、《正義》は誰の心に存在するが《彼自身の正義》があるわけではない。それはとても恐ろしく忌々しい。

だが……。

「……それでもあの人の意志は受け継がられている。」

いずれ平成は終わるだろう。『仮面ライダー』はいつかは消えていくだろう。しかし忘れてはいけない……。

「……《正義の心》は永遠に受け継がれていくことを!!」

「……覚悟は決まったよ巧」

アーチャーの表情にはもうすでに迷いはなかった、双剣を構えると『ウジウジしてんじやねえぞ』と乾の声が聞こえた気がした。

「……………そうか、でまだ戦うか？」

「ああ、彼女の命令でね。簡単にはいかないのさ」

「めんどくせえな」

「そう言ってくれるな、彼女にも考えがあつての事だ」

「そうかい、なら本気でやらせてもらおう！」

すると、九条は巨大な橙色のロックシードを掲げる。

『『変身ッ!!』』

《カチドキッ!!》

空間を裂き現れたのは今までとは規模が違う大きさの橙色の物体だった。

《ソイヤツ!!カチドキアームズ!!いぎ、出陣!!エイ!エイ!オッー!!》

勝鬨が流れ現れたのは重装の鎧武者。背中には二振りのカチドキ旗、その手にはDJディスクが搭載された火縄DJ銃。

「……仮面ライダー鎧武・カチドキアームズ」

「行くぞおッ!!アーチャー!!」

「ウオツツーーーー!!」

双剣を構え突撃するアーチャーに応戦するように九条は背中の方チドキ旗を抜き、奔る!!

「くっ!!力が段違いだ!!」

「当たり前だ、馬鹿野郎!!」

カキンツ!!と二人の獲物が空中に吹き飛ぶ。アーチャーは弓を、九条は火縄DJ銃を構えた。

双方の吹き飛ぶ。相討ちに近いだろう。

ーーーーしかし…。

《カチドキチャージ!!》

「なっ!?!」

砂埃の中から九条が火縄DJ銃大剣モードを振りかざしながら現れた。

咄嗟の状況にアーチャーは追いつけず迫る九条を眺めることしかできなかった。橙色の濃いエネルギーが一閃を描き、アーチャーを振り切る。

二人は背をお互いに向けながら立つ、すると九条は変身を解いた。それと同時にアーチャーが地面に膝を付く、そして身体から光の粒子が溢れ出ていた。

勝ったのは九条だった。

二人は無言のままお互い背を向け続けた。そこには語る言葉を無かった。二人にしか分かり合えない思いが伝えあっていた。

「ーーーーありがとう、『仮面ライダー』」

アーチャーのか細い声が風とともに聞こえた。

それ以上はただ寂しい風の音が聞こえるだけだった。

「……………」

そして、九条は何も言わず振り返ることもなく藤丸の元へと走り出した。

真つ暗な空に青いモルフオン蝶が飛んでいた……。

一方、藤丸たちは墜ちたアーサー王に苦戦を強いられていた。

「……………どうした？ 貴様の『護る力』とやらはその程度か？」

「クッ!!」

何度目かの暴力、吹き飛ばされては立ち上がりまた吹き飛ばされるの繰り返し。既にキャスターはやられボロボロのマシユだけが戦っていた。藤丸は唇を強く悔しく噛む。何もできない、ただマシユがボロボロになっていくのを見てるしかできなかった。

「……マシユの『夢』を護ると誓ったじゃないか!!」

共に背負うと誓ったではないか!! それなのに何だこの体たらくは!! 無力感は!!

「フンッ、遊びはもう終わりだ」

冷血な表情のままセイバーは黒き聖剣を掲げ、漆黒の力を満たす。

「……あれは駄目だ!!」

「マシユ!! 逃げてッ!!」

藤丸が叫ぶ。しかし、マシユにはもう既に攻撃を回避するのも盾で防御する力さえなかった。

『約束された勝利の……』

《カチドキスカッシユ!!》

「ムッ!？」

そこへ間を割るように橙色のエネルギーがセイバーに直撃する。

「遅れたなッ！ 藤丸!」

「ッ!？ 遅いよおッ!」

カチドキアームズを身に纏った九条が倒れているマシユを抱えあげようとしたとき。

「背中がガラ空きだぞっ!!」

「なっ!?ウグあッ!!」

飛んできたセイバーの聖剣を背中から直撃してしまう。背中の中の鎧がいつも容易く剥がれ破壊されてしまった。

「クソッ!!」

しかし、九条だってやられぱなしではない。火縄DJ銃の引き金を引く、弾はセイバーを一直線に飛んでいくがセイバーはそれらを聖剣で切り裂いていく

次の瞬間には九条の目の前までに迫っていた。なりふり構ってはいられない、九条は火縄銃を捨て腰の無双セイバーで応戦する。

「……………温いッ!!」

しかし、しかし。聖剣の刃は無双セイバーをたたつ斬られてしまう、啞然もする余裕を許さずセイバーの剣は九条の鎧を容赦なく斬り伏せる。

「その程度か『仮面ライダー』。」

セイバーは嘲笑う様に九条を踏み付ける。その行為に満足したのか藤丸たちに狙いを付ける。

「次は貴様らだ」

「ヒイツ!?た、助けてレフウツ!!」

圧倒的な力量の差。藤丸は蛇に睨まれた蛙の気持ちをはじめて理解した。ヒョロヒョロのマシユがなんとか盾を持ちながら藤丸たちの前に立つが頼りない。

一歩、また一歩。死が近づいてくる……………。

死を覚悟した。いや、覚悟なんてできてるわけがなかった、どうにもならない一般人な私はこうして叩きつけられている理不尽な現実には抗えず怯えているだけなのだから。

—————

『THE END?BADEND?HAPPYEND?』

選択肢が俺の頭の中で展開されていた。
いつかだったか、こんなことがあったか。

『THE END? BAD END? HAPPY END?』
同じ選択肢だ、あの時と。

END、とか言うならこれを使い切れば終わりなのか。

『THE END? BAD END? HAPPY END?』
——違う。これは只の幻にしか過ぎない。
俺の戦いに終わりはない。あつてはいけない。

『THE END? BAD END? HAPPY END?』
うざったい、この声も。結果も。未来も。
大丈夫だ、まだ立てる。

『THE END? BAD END? HAPPY END?』
そう大丈夫だ。なんたつて俺を今まで支えてくれたのは《拾八の道
の人》なのだから。

『護るのも壊すのもお前次第だ』
「だったら、ぶっ壊して繋いで見せる《未来》を」
「旅の始まりだ。気をつけろよ」

《フルーツバスケットツツツツツ
!!!!!!》

黄金の鍵は握られた。

—————

《フルーツバスケットツツツツツ
!!!!!!》

困惑と驚愕が入り混ざった感じが中々抜けない、でも私には分かっていることがあった。

「……もう、セイバーは勝てない。と

九条は威風堂々と立ち振る舞う様に極ロックシードを捻る。

《大橙丸!》

すると、九条の手元にオレンジアームズのアームズウエポンの大橙丸が現れる。

「見せかけだ!」

セイバーが地面を強く踏む。勢いに乗り聖剣で九条の首を狙う。しかしヒラリと躲すと同時にセイバーに一太刀、川の流れのごとく斬りつける。

「グワハアツ!?……まだまだあつ!!」

《マンゴーパニツシャー!》

次の瞬間、セイバーの顔面にマンゴー型の重量型メイスに吹き飛ばされる。しかし、これは転機と思ったセイバーは魔力を噴出し、体制を立て直そうとするが。

「そんな時間がやると思っただか?」

《影松!・影松!・影松!・影松!・影松!》

空中に現れる五本の黒い槍。それはセイバーの四肢を貫き地面に縫い付けられてしまった。

「……まだ、やれんだろ?」

九条の挑発するような表情が手に取るように分かった。だからこそセイバーの騎士の魂を貶されたと理解していた。静かに怒る、一瞬に感覚を研ぎ澄ます。武器を一つも持っていない九条を見て、さらに怒りを増す。

「……そして、銃弾のように放たれた。

「残念だったな、詰みだ」

《極スカツシユ!》

次の瞬間には手遅れだった。バナナの形をしたエネルギーが地面から生えセイバーを拘束した、セイバーはその時見た。九条の手元にバナスピアーが召喚されたことに。

《火縄DJ銃!無双セイバー!》

「ッ!」

九条が大剣を携えて、セイバーの元に一步また一步と、近づく。セイバーは何とか拘束から逃れようと藻掻く。しかし、エネルギーは絶えなくセイバーを捕える。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

近づく、藻掻く。

そしてー。

「……これで終わりだ!!」

《極オーレ!!》

虹色の光が闇を切り裂いた。

—————

「聖杯、確保しました。ミッション達成!」

『やったね!!いや、ホントに!!まさかアーサー王に勝つなんて!!すごかったなあ極アームズ!!』

「疲れた」

「大丈夫? 肩揉む?」

「頼む」

各々が勝利の美酒に酔いしれていた。絶望的状况から大逆転というのはとても気分が良いものだろう。ただ一人オルガマリーは不穏な表情で居た。

「……何してんの?」

「ヒヤッ!? ちよ、びっくりさせないでちょうだい! 只考え事をしていたのよ!!」

ヒステリックに喚き散らすオルガマリー、九条には少し引つかかっていることがあった。それはセイバーが消えるときに言った。

『「グラントオーダー」』

その言葉が何を指すのかまだ分からない、いずれ分かることだと納得させた。今はただこの状況に浸かりたいそんな気分だった。

「……しかし、それは容易く打ち砕かれた。」

パチパチパチパチパチパチパチパチ

「ッ!？」

突如聞こえた拍手の音皆が警戒した、音の発生源には――。

「……レフ?レフなの?」

生存の望みが薄いとされていたレフ・ライノールその人がいた。オルガマリーは感極まった、頼れる人に。依存している存在に。再び出会って嬉しくないものはいない。

すぐさま駆け寄ろうとした時、九条に手首を強く握られ阻止される。

「ちよつと!何すんのよ!!」

「行くんじゃないぞ、アレは人間じゃねえぞ」

「はあ?何言つてのアンタ。ほらレフ何とか言つてよこのバカに」

「……………」

「……レフ?どうしたのレフ?何とか言つてよ。」

「……全くどうしてこんなにイレギュラーのことが起きる。とても腹ただしい」

「見えた。奴の本性が、獣のように鋭く憎しみが込められた姿が。オルガマリーは変わり変わってしまった想い人を見て子鹿のように震えていた。」

「……それがお前の本性か?」

「それを見破ったところでどうする?私がカルデアを爆破した真実は変わらんぞ」

『「は?」』

誰もが息を忘れた。飲み暇など衝撃によつて阻害されてしまうば

かり。今、今やつはなんと云った？カルデアを爆破しただと？

「う、嘘よねレフ？」

「オルガ、そのうるさい口を閉じとけ。今私はそのやつと話している」

理想と儂い恋心が粉微塵となった瞬間だった。

「さて、要らない邪魔が入ったところで――、貴様何者だ？」

レフが九条だけを見据えて睨みつける。

「――意味によるな、またはどんな『ライダー』にもよるが」

「ふん、答える気はないという訳か。まあ良いだろうそこまでの脅威ではない、さて諸君改めて自己紹介しよう。私はレフ・フラウロウス二千年担当だ。」

「何言ってるの？何言ってるのかワカラナイヨオツ!!!」

オルガマリーが膝を抱え倒れ込む、その様子を見てレフは卑しそうに嗤う。

「オルガ、何苦しむことはない貴様は既に死んでいるのだからな」

「へ?」

「――まさか、気づかなかったのか？これは滑稽だ！私が爆弾を仕掛けたのなオルガ、君の足元なんだよ。君は以前からレイシフトの資格を持っていなかったらどう？それが死んで霊体というちっぽけな残りカスになったおかげで君は今ここにいる」

「いやあ、いやあ、いやあ。」

「そう何度も言ってやろう!!オルガマリー・アムにスファイア、貴様はとつくの等に死んでいる!!」

「イヤアーーーーー!!!」

「テメエエエエエ!!!」

《フルーツバスケット!!!》

《ロックオープン!!極アームズ!!大・大・大・大・大將軍!!》

《大橙丸!バナスピーアー!》

「うおおおおおおお!!!」

怒りに身を任せて突進する、なりふり構ってられないこのクソ野郎をこの世から消さなければならぬ!!

ーーーーしかし。

「下賤な、これだから人類は愚かなのだ」

「ぐっ!!!」

見えない力が突如として九条を襲う、一瞬にして壁にめり込まされる。

「誠一!!」

「さて、オルガ。せっかくの別れだ、最後に君が愛したカルデアスを見せてやろう」

パチンつと指を鳴らすと同時に空間に大きな穴が開く、空けた空間の先には真っ赤に染まったカルデアスがあった。

「カルデアスが……………」

「これが指す意味共に学を学んだロマニ・アーキマン分かるであろう。人類は文明の衰退や戦争によって終わったのではない、焼却されたのだ!!我が王の寵愛を受けられずに貴様らは自らの無力を思い知り絶えるのだ!!」

『ーーーーレフ教授、これらの所業全て貴方の仕業だったか!?今外部と連絡がつかないのも応答がないのでなく応答する相手がいないそ

「むっ。そろそろこの特異点も限界か、さてカルデアの諸君残りの時間を怯えながら暮らし給え!!」

そう言うとなレフは光とともに消えていった。

『ヤバイーもうこの空間が崩壊を始めてる。ギリギリのレイシフトになるかもしれないッ!!』

「誠一!!」

九条は只項垂れめいた。脳裏にオルガマリーの悲痛な表情がこびりついていた。まただ、また救えなかつた。また、届かなかつた。

降り積もる後悔の中、次第に怒りが湧いてきた。

「レフ・ライノール。奴は俺が殺す!!」

殺意が絶え間なくその身を駆け巡る。

そしてレフ!!

「ぜってえー、許さねえぞ!!レフ・ライノールウウウツツツツツ
!!!!!!!」

怒号ともに九条達は光に包まれた。

レフさあ、旅の始まりだ。存分に拗うが良い

『仮面ライダー』

第六廻 項垂れている時間は無く

皆の笑顔を守った。

――変身!!

自身の記憶を失っても神さえ倒した。

――変身!!

戦いを終わらせるために生き残り続けた。

――変身!!

夢を護るために戦った。

――変身!!

友のために人外になった。

――変身!!

後の世代のために戦い続けた。

――ハアツ!!

己の大切な人の為に世界さえ敵に回した。

――変身!!

時を護るために五人で戦い続けた。

――変身!!

愛する人のために戦った。

――変身!!

自身が何者であるか、それを知る為に世界を巡った。

――変身!!

愛する街を護った。

――変身!!

救いたい欲のために戦い続けた。

――変身!!

友のために宇宙を駆けた。

――変身!!

誰かの希望のために戦い続けた。

――変身!!

人類を信じ、未来を信じ、神になった。

――変身!!

刑事として、『仮面ライダー』として、人々のために戦った。

――変身!!

限りある命の為に魂を燃やした。

――変身!!

患者の運命を変えるために。

――変身!!

皆が皆、変身した。

誰かのために。

人々の自由の為に。

平和のために。

幾度も挫折し、

命を削った。

それなのに……。

そんなすごい人たちの力が有るのに――。

「なんで、誰も助けられないんだ」

九条誠一はベットの上で体育座りしながら、悔やむ。

オルガマリーに手が届かなかった、あの一瞬は脳裏に焼き付きフラッシュバックの様に瞼の裏で繰り返されている。

だから、眠るのが嫌だった。

かれこれ、3日は寝ていなかった。

しかし、体調には変化はない。至って平常だった。

「アンデット化のおかげか、またはオーバーロード化のおかげか

.....」

つぐつく人間離れしてきていると九条は自嘲する。

彼は幾度もなく戦い続けた。

理由もなければ、決意さえ固まっていなかった。

それでも、九条誠一は戦わなければならなかった。

彼以外に戦^仲える者はいなかったからだ。

何度もやめようと思った。逃げようとした。

しかし、彼^{板面ライダー}らはそれを許してくれなかった。

強敵とかち合えば希望^{絶望}の意思が身を奮わせた。

恐怖で動けなくなったら戦^{自分にはない}う理由を脳裏に反響させられた。

体もそれに追いつくように強^{改造}い体にさせられていった。

心が折れれば折れるほど、すぐ様何かで補修され強化されていく。

自分とは関係ないものでもそれは強制的に押し付けられて、いつの間にかそれが当たり前前のようにようになってしまった。

大切な者を守りたい。愛する街を守りたい。

世界中の人々の笑顔を守りたい、希望を護りたい。

九条にはそんな推敲な信念はなかった。

それでも、責任は背負い続けている。

矛盾し続ける彼の姿は他者さえも傷つけられていた。

すると、スピーカーから音声が流れてきた。

『ピンポンパンポン。えく、カルデアの職員諸君。お昼休みに申し訳ない『特異点』だ。スタツフはすぐ様配置に付いて、それとマスターとサーヴァント達はコフィンまでに至急集合すること。』

そういつて放送は終わった。すると部屋の前を何人かの人々がドタバタと音を立て通りすぎて行った。

「……行かなきゃ。」

ベットの脇に置いてあった、白金のスロットルドライブを腰に巻きつける。

やらなきゃいけないことがある内は立ち止まれない、そう決心しながら部屋の外へと歩きだした。

「急で悪いが、君たちには1431年のオルレアンに向かってもらいたい」

私達を出迎えたドクターの最初の言葉は次の旅の案内だった。

「あのおく、オルレアンって何処ですか？」

「……フランス、丁度百年戦争の真っ只中の時だね」

そこに現れたのは絶世の美女と百人中百人が思う姿をした、レオナルド・ダ・ヴィンチ。その人だった、何故性別が違うのかというところナリザが好き過ぎて自身がそれになってしまおうと試みた結果らしい。

「君たちにはやってもらいたいののは2つ、『特異点の調査及び修正』と『聖杯の調査』だ。レフがあらゆる時代に聖杯を送り出し数々の異変を起こしている。それを君たちが解決するんだ。」

「……あのさあ、なんで一つ一つずつ解決しなきゃなんねえんだ。別働隊に別けて2つずつ攻略してきやいいんじゃないのか？」

そこに遅れてやってきた九条誠一が訝しげにドクターに問いかけ

た。

「別働隊って、まだこのカルデアには分断できるほどの戦力はないよね?」

「何言ってるんだ、俺がいるだろ。俺が一人でその『特異点』とやらを攻略すればいい」

「君を一人で戦わせるなんて、できるわけ無いだろ!!」

「……甘ったれてるんじゃねえぞ。今は一刻も争うときだ、一人が巨大な戦力を誇っているのにそれを活用せずしてどうする!？」

「そつ、それは……」

「ちよ、ちよつと待つてよ。ここで言い争っても仕方ないじゃん」

「その通りだ。それに九条誠一、貴様は作戦に付いてああだこうだ言える権利はないと思うがね」

「……………どういうことだ、エミヤ」

最近、召喚して出てくれた赤い外套のアーチャーさんを誠一さんは睨みつけた。

「どうもこうも、君はミーティングに参加していないであろう。今まで部屋に籠りっきりの人間の意見をなぜ聞き入れなくてはいけなない?」

一理ある。しかし、納得できないモノもある。そんな顔をしていたのだ誠一さんに

「それに、特異点は7つは観測はできたけど膨大な魔力の嵐で詳細まで確認できなかった。つまり……」

「二つずつ攻略してこい、というゲーム嗜好に凝ったレフからの挑戦状さ」

ダビンチちゃんがドクターの言葉に解答を付けた。

遊ばれている。私たちはレフに弄ばれている、とても悔しいが歯を食いしばって皆は耐えている。怒りに、悲しみに、無力感に。

「……いいぜ、行こう。こんな巫山戯たゲームサツサと終わらせるために」

なら、なら！私のこの燃えたぎる怨念をどうやって晴らすのよ！！
「……私、私が、『俺』が晴らしましょう。あなたの代わりに。
「……俺」があなたの意志を完遂させてみせましょう。だからあなたはその間近で見ているほしい。私は貴方みたいな人が『悪』と呼ばれるのが悔しくてたまらない。

貴方は、一体？

《Darts on!!》

不意に少年が腰の黒曜石の色をしたベルトの赤いボタンを三連打する。ベルトから発せられた音声とともに少年を中心に様々な紋章が飛び回る。その光景は少年が黒い暗幕から出てくる前の主役俳優のようにスポットライトで歓迎されていた。

「俺の名前は十条……誠、またの名を……」

《リュウガ》

「仮面ライダーダーツだ。」

「変身」

龍のエンブレムが刻まれた黒いカードデッキをVバックルに差し込む。その瞬間3つの影が重なり一つになる。現れたのは黒い竜騎士。

「仮面ライダーリュウガ」

龍騎の反転した悪のライダー。

今、オルレアンに立つ!!

